

紫式部が見た「三尾が崎」

越前への旅

1月に始まるドラマの主人公として注目される紫式部は、長徳2年(996)、越前守に任じられた父・藤原為時に従い、生まれ育った京を離れて越前国(福井県)に向かいました。その旅の途中で作られた和歌の多くは、私家集である

「紫式部集」に収録されて今に伝えられており、この中には、紫式部が高島の風景を見て詠んだと考えられる次の歌が含まれています。

近江の海にて、三尾が崎といふ所に、網引くを見て
三尾の海に網引く民の手間もな
く立ち居につけて都恋しも

紫式部の一行は、当時の貴族の旅の状況等から推察すると、京の都から逢坂山を越えて大津に至り、そこから船に乗って湖西沿岸を北上したものと考えられる



三尾が崎(明神崎)を望む



白鬚神社の境内に立つ紫式部歌碑

ます。そして高島の「三尾が崎」付近で停泊し、さらに船で塩津(長浜市)に向かい、そこからは陸路を通って敦賀に向かったと思われる。この歌は「湖岸で網を引く漁師が忙しく立ち働く姿を見るにつけても都が恋しい」という、生まれ初めて都を離れた紫式部の望郷の思いを、高島の情景とともに表した歌として知られています。

『源氏物語』の執筆

紫式部は越前に向かった2年後に父の任期終了を待たずに帰京し、藤原宣孝という同階級の貴族と結婚します。宣孝の死後、ときの最高権力者・藤原道長の娘で一条天皇の中宮であった彰子に仕えながら、有名な『源氏物語』を書きあげたことはよく知られているとおりです。

「三尾が崎」の場所

紫式部が見た「三尾が崎」は、その先端に白鬚神社が鎮座する現在の明神崎付近と考えられています。「三尾」の地名は早くから使わ

れていたようで、『万葉集』の歌に登場するほか、『延喜式』に定められる古代北陸道の駅名の一つでもあります。また『続日本紀』の藤原仲麻呂の乱(764年)に関する記述の中には「高島郡三尾崎」という地名があり、弘安3年(1280)の「比良荘絵図」には「三尾川」の上流に「三尾社」が描かれています。この「三尾川」は鴨川のことと考えられることから、「三尾」は、南は明神崎から北は現在の安曇川町三尾里周辺までの広い範囲を表す地名だったのでないかとも考えられています。

図 文化財課 (25)8559

編集感

あけましておめでとございます 本年もよろしくお願いたします

さて、現在企画広報課ではインスタグラムで「#高島の絶景2023」キャンペーンを開催しています！市内で撮影した写真なら何でもOKです！この年末年始に撮影した高島市の絶景をぜひ投稿してください！(Y)



TAKASHIMA.CITY



広報たかしま

令和6年

1

月号

No.288

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課

〒910-1202 滋賀県高島市新旭町北畑のの番地

0740(25)8000(代)

https://www.city.takashima.lg.jp

t-info@city.takashima.lg.jp

